時評」の記述めぐり議論

8月25日付朝日新聞朝刊に掲載した「文芸時評」について、本文でとりあげられた小説「少女を埋める」（文学界9月号）著者の作家、桜庭一樹さんから記事が作品の内容と違うという趣旨の指摘があり、議論が広がっています。桜庭さんと、文芸時評の筆者で翻訳家・文芸評論家の鴻巣友季子さんに、見解を寄稿してもらいました。

読み方は自由でも……あらずじと解釈は区別を

作家 桜庭一樹さん

私の自伝的な小説『少女を埋める』には、主人公の母が病に伏せる父を献身的に看病し、夫婦が深く愛し合っていたことが描かれています。ところが朝日新聞の文芸時評に、内容とは全く逆の「（母は父を）虐待した。弱弱介護の密室での出来事だ」というあらずじが掲載されてしまいました。

そのようなシーンは、小説のどこにも、一つもありません。朝日新聞は数百万部発行の巨大メディアであり、影響力は甚大です。時評で「自伝的随想のような、不思議な中編」と紹介されたこともあり、私は故郷の鳥取で一人暮らす実在の老いた母にいわれなき誤解、中傷が及ぶことをも心配し、訂正記事の掲載を求めました。

その自由です。時には実際の描写にはない余白のストーリーを想像（二次創作）することもあり、それも読書という創造的行為の一つだと私は考えます。しかしその想像は評者の主観的解釈として掲載すべきであり、実際に小説にそう書かれていたかのようにあらずじとして書いては、いけない。それは、これから小説を読む方の多様な読みを

阻害することにも繋がります。評者の鴻巣友季子氏は、ネット上で「解釈は自由」、読みは「あらずじと解釈は不可分」という文学の一般論を、自分の想像をあらずじとして紹介したことへの言いわけに使っているように見えました。作者の私は、そういった意味合いで「自由」な文芸時評が「読者の解釈の自由」を奪ったことに抗議するとともに、母の名誉の回復をも願っています。

作品に創造的余白 読者の数だけ「ストーリー」

文芸時評筆者 鴻巣友季子さん

本作は掲載誌にも「創作」と銘打たれ、優れたフィクションとして読んだ。人物モデルがいらないに拘わらず、現実とは切り離して紹介したい。

温かなだけの家族小説ではない。主人公が過去に母から受けていた暴力、それを他言しないよう頼まれたこと、夫婦の不仲。抑圧され「怒りの発作」を

抱えた母、その「嵐」をこらえていた父……。だからこそ、母と娘、妻と夫の絆の再生と、主人公の決意が胸を打つ。

母の父への「虐め」については複数の読み方が可能で、私の評でも解釈の提示にとどめたつもりだ。読者の自由と多様性は桜庭さんも大切にされている。読者の数だけ「ストーリー」が

あるというのが前提なのだ。

あらずじと評者の解釈は分けて書いてほしいと要請があったが、これらを分けるのは簡単そうではない。小説にはあえて「言わずに言う」ことや、省略、暗示、要約等の空白がある。例えば、女が男に掴みかかろうとする描写の暫し後に、女が「乱暴してごめん」と謝る場面があれば、暴力があったと理解する妥当性がある。本作には創造的な余白が多く、そこが一義的な

「感動小説」と違う点だ。

あらずじも批評の一部なので、作者が直接描写したものが書かない等の不文律を作ってしまう事の影響は甚大だ。読者の自由ひいては小説の可能性を制限しないか懸念される。

それでも今回は要請に従いウェブ版を修正した。批評者として守るべき原理原則はあるが、桜庭さんの気持ちを思うと苦しかった。自分の読みを常に問い直すべしと心に刻んだ。